

第30回 音楽会の全体

「祈りの音楽会」

武田 若菜

2014年度の音楽会を始めるにあたって、音楽部会ではまず「自由学園の音楽」がどうあるべきかを考えました。それは第28回、29回の音楽会を経験された梅田先生からの問題提起でもあり、創立100周年を迎えようとカウントダウンにはいった今だからこそ、しっかりとした検証をしつつ音楽教育に取り組みたいとの音楽教員の思いからでもありました。

I はじめに

この音楽会を迎えるにあたり議論は前回の音楽会を終えた新年度の春から早速始まりました。音楽部では長年ご労苦された先生方のご退職の時期となり、音楽部の体制も変わることから次の音楽会を視野に入れた話し合いがもたれました。学校全体としても感性教育について見直しが始められていた時期でした。以下は5月に用意し学園新聞に掲載された文です。

今年行われる第30回目の音楽会を迎えるにあたり自由学園の音楽教育がどうあるべきか、またどのような音楽会であるべきか議論が交わされてきた。梅田先生をはじめ自由学園の音楽教育に新たな風を送ってくださる先生方のお力と、長きに渡って自由学園の生活即教育の理念に立った音楽教育の意味を苦しみつつ考えてきてくださった歴代の先生方の思いが相俟って、生徒たちのために妥協のない本当に良いものが生まれようとしている。

今年はまだその過渡期にあり、授業の中で新たな試みはされつつも、その効力が演奏の中に発揮されるには至らないかもしれないが、必ずや豊かな音楽性を持つための根っことなるものと信じている。その一つが一貫教育を強く意識して昨年から力を入れている読譜力の基礎を養う取り組みと心を育むために幼子のころから生活を通して積み上げる教育である。その到達点として学部による

宗教曲の演奏がある。創立者が教育の目的とその方法の中で「教育と宗教は、全く一つのものだと私は深く信じている」と述べられているように、音楽の学びの中で魂が豊かに養われ、音楽的表現へと昇華されることを目指す。また、中高の生徒の中には音楽の持つ性格の一部をすべてと錯覚し「自分が楽しむ」ことにのみ価値を見出そうとする傾向がみられるが、自分に厳しく真剣に取り組むところに楽しさがあることを是非体験してもらいたい。

例年行われていた高等科以上の学年による宗教曲の演奏は、もう少し実力が伴ったところで行うこととし、今年の音楽会では学部のみ演奏とした。その代り、高等科の混声コーラスが初の試みとなる。また他教科と音楽科の連携による取り組みも行われる。

この文にあるように生みの苦しみは始まりました。まずは一貫教育としての軸を音楽の先生方に提示し、学部の扱いを高等科までの歩みとは切り離さず、むしろ学部を頂点とした学びの構図が成り立つために年齢に応じた学習プランを考えていただけるようお願いをしました。梅田先生の強力なアドバイスのもとオーケストラ、ブラスバンドの講師の先生方との忌憚のない意見交換も常に行われ、それらは音楽科独自で始められたシラバスづくり、日々の指導に反映されていきました。一方、音楽科の教育理念を著作集や創立者と斉藤秀雄先生の対談記事に求め、実際につけたい力と、

その体験を通して得させたい感性とを教員の中で共有していくこととなりました。しかし、内申書など進学における縛りの無い当校においては、善かれと思って立てた学習プランも授業中に成就するとは限らず、実践の難しさの中で打ちのめされることの連続でした。それ故まだまだ道半ばです。この試行錯誤の3年目にあたる音楽会の年を、演奏会としての体裁を整えることよりも、「教育の発表の年」と位置づけることとし、考えてきたことがどこまで生徒学生たちの力となっているか、できるところまでの発表をしたいと願った音楽会でした。

II 経過

(1) 音楽会のテーマは「祈り」と提示し、音楽部会で思いを共有しました。それにより、初等部から学部まで音楽会で歌う曲については上記のテーマに沿った選曲ができました。また各授業でも生徒・学生との間で音楽会に込める思いの共有はしてもらってきましたが、この音楽会を通して得させたいものを11月の礼拝の中で生徒・学生に明確に伝え、それらすべてをもって「祈り」を演奏の中に顕し、生まれた響きが空間に広がり自分に語り掛けてくる神聖な感覚も味わってほしい旨を話しました。以下①②③は礼拝で話した音楽会に望むことです。

① 全員参加によってつくり

全員が参加することにより、協力して良いハーモニーを生み出します。そのためには好き嫌い得手不得手を越えて、個々の自治力を高め自分の責任を果たし、構成メンバーは色々だけれど表現の質も高い、という演奏を目指してほしいと思っています。それにより皆で参加する音楽は一人では決して出すことのできない響きを空間に放ち、自分が幸福感を味わうだけでなく、聴く人にも感動という幸せを運んでくれることを体験してほしいと願っています。

② 本物に触れる

生徒・学生は現役で演奏活動をされている先生方にご指導をいただいております。かなり厳しいご指導も受けます。そのことは、良い演

奏を作り上げていくときに妥協は許されないことを知る良い機会となります。また、芸術劇場を使うことは、一流の音響設備のある演奏会場で良い響きを追及することができます。さらに良い発声で音色を考え、ダイナミックも練習してきました。それらの表現が会場にどう響くのか楽しみにしてほしいと思います。

③ 精神性を深める

技術を磨き、自分自身との葛藤に勝利し、知性を高めて楽曲と向かい合ってきた人たちは、音楽の最終段階である信仰の帯すべてを括り、魂の深いところで音楽を奏でられる経験をしてほしいと説に願っています。『教育三十年』の文中に齊藤先生のお言葉がありますが、機械にはできない音楽、手品師のような技巧だけのものではない、本当の意味で人の心を動かす演奏が本物であり大切なことだとおっしゃっていると思います。一心に思いを込めて演奏する時にその歌声は昇華して会場いっぱい祈りとして響き渡ることでしょう。讚美を棲み処とされる神様は、それを必ず喜んでくださいます。

(2) 今回初めての取り組み

- ① 高等科の混声コーラス
- ② ロビー展示に教科横断的取り組みの報告を
実験装置などと一緒に展示した
- ③ オーケストラ伴奏では日本初演の曲を
学部生・約60人で演奏
- ④ ハレルヤコーラスをシングイン（観客の
皆様にも歌っていただく）の形にした
- ⑤ 来場者にアンケートを実施

III おわりに

音楽会を終えた後の生徒・学生の感想には、達成感や自信、祈りの体験、感動、授業への取り組みに対する内省など、得られたらよいと思うものが溢れていました。男子部ではこれを機にもっと音楽を学びたいという人たちの声でグリークラブが立ち上げられました。女子部からは、教育の結実が高等科3学年から提出された感想として表わされました。

今回の演奏会は、経費削減と会場となる芸術劇場の改装により使い勝手が変わってしまい、当日の準備では出演する生徒もひな壇づくりをしたり、控えの部屋数を少ない中でやりくりしたり、バックヤードの移動も時間のやりくりとの関係で複雑になり大変でした。困難はいろいろとありましたが、ここ数回の音楽会にない良い出来栄であったと皆様に言っていただけましたのは、音楽会運営のために組織をつくり力を出してくださった先生方、学生、生徒の皆の協力のお陰で、会当日を支えていただけましたこと、また梅田先生、羽山先生、佐伯先生をはじめ、音楽の講師の先生方、助演の先生方のご配慮など、練習の時から音楽に

携わるすべての方々が、真剣かつ必死でこの音楽会に向き合っていただきましたところによると思います。ハレルヤコーラスではお客様にもご一緒に歌っていただき会場が一体となって終えられました。鳴りやまぬ拍手とブラボーの声。お寄せいただきました300通近いアンケートには高い評価と今後への期待、有り難いアドバイスが書かれていました。教育の発表と位置付けたために演目が多くなってしまったことについては、次回への改善課題です。

皆様の祈りに支えられました音楽会であったことに深く感謝いたします。

